

研究の現場から

嫌われ者、でも付き合いたい

本人ならぬ本草にとっては、ありがたくもないドクダミという和名をつけられたお馴染みの植物がある。臭いがイヤだとか、根が深くて防除が困難であるなどと嫌われてはいるが、薬草として用いられ、こちらでは幾多の効果から十葉などと重宝がられた名前がついている。西洋医学の発展で最近では表立った出番は少ないようであるが、民間漢方薬では最も知られた植物ではないだろうか。生傷の絶えない子供時分には、できもの、腫れ物の傷口に貼り付けられたことがよくあった。

生葉を網袋に入れて冷蔵庫にいれたら庫内の臭いが少なくなった。臭いで臭いを制す、立派な脱臭剤である。しかし、乾燥した葉を煎じた漢方薬としての効果は試していない。

嫌われ者であっても、お日様に葉をかざしてみるとまるで血管のように葉脈が波打っていて、元気のよさを示してくれた。

根堀り、葉堀りというが、掘って地下茎をたどると、とてつもなく長い。地上部の脈々と波打つ葉脈、地下深くまで潜り込み、家族を増やす地下茎、この元気が漢方薬としての源を示しているようにも見える。

ワルナスビも、まるで嫌われものような名前を頂戴しているが、茎だけでなく葉の表面にも棘があることは抜き取られ、食べられることのないように自己防衛しているのであろう。食べるつもりはないが、観察用にと抜き取ったら案の定、棘が刺さった。きれいな花には棘があるというが、葉っぱにも手出しできない。この棘で帰化植物としてのテリトリーを拡大しているのであろう。

「野に置けレンゲソウ」や、「掃き溜めに咲いた菊」などとの表現があるが、まさにハキダメギクは目立たない小さい花である。最初に発見されたところが庭の片隅の箒で掃き寄せられたゴミの山に咲いていたところから、この名前が

つけられたというが、今は畑や道端での存在を主張している。「掃き溜め」なる言葉を使うことも少なくなった昨今、和名の変更がありそうなものだが、文学的には情緒があるので残しておいてもよい。

ハキダメギク（掃き溜め菊）の類似雑草に同じ属のコゴメギク（小米菊）がある。なんと可憐な名前をいただいたことだろう。

不名誉な名前をつけられた草ば、これらのほかにもママコノシリヌグイ、オオイヌノフグリ等、すでに今は使われていない用語も含めて、枚挙にいとまがない。

変な名前をつけられ、嫌われている草でもじっくりと観察すれば愛嬌のあるものである。ドクダミの血管のような葉脈、ワルナスビの鋭い棘、ハキダメギクの可憐な白い花、タチイヌノフグリであってもオオイヌノフグリでもその花と実には愛着を感じるものである。

これらの植物はいずれも、野草として、あるいは雑草として扱われるが、これは人間のご都合での身分である。雑草となれば当方にとってはめしのタネで、ターゲットである。しかし、嫌われ者としてだけではなく、これからも大いにお付き合いし、そして悩ましていただきたい。善き友、雑草は尽きることなし。



ドクダミ
Houttuynia cordata



ハキダメギク
Galinsoga

(文とカット 井上信彦)